

所報

No.147
令和7年10月15日

富山県総合教育センター

富山市高田 525

E-mail : sogokyoiku@ed.pref.toyama.jp (代表)
URL : <https://www.center.tym.ed.jp>



センター
ウェブサイト



センター
Instagram

学びの積み重ねが、未来を切り拓く 一夏の研修一

教育研修部



初任者研修会（小・中・高・特）・新規採用教員研修会（養・栄）
「チーム育能力向上研修」



新規採用教員研修会（幼・保）
「季節を感じる幼児の造形遊び」

科学情報部



理科教育講座（自然観察入門コース）
「学校周辺における生き物観察」



授業におけるICT活用研修会（生成AI活用コース）
「生成AI時代の新しい教室 先生は伴走者、生徒は創造者」

教育相談部



学校カウンセリング講座（みんなが生きるチーム支援コース）
講義「『チーム学校』づくりとミドルリーダーの役割」



発達障害教育研修会～気になる子供の理解と対応～
講義「ライフステージに応じた指導・支援の在り方～幼児期から青年期～」

センターNews

生徒海外派遣事業は、今年度がラスト！

第43回富山県高等学校生徒海外派遣事業は「オレゴン州と富山県の持続的な発展—未来を切り拓くグローバル・リーダーの育成—」を研修テーマとし、令和8年3月9日出発の予定で行われます。先ごろ各高等学校等に派遣団員を募集し、20名の団員が決定しました。

第1回事前研修会が9月24日に当センターで行われました。開講式では、団員決定通知書を当センター所長から受け取りました。これまで42年間で832人の先輩たちを派遣してきた事業の最後の20人として、決意をもって研修会に臨んでいました。



各部の研修より

教育研修部

自分を見つめ、仲間と関わり合って自他への理解を深めよう

初任者研修会・新規採用教員研修会「メンタルヘルス研修」「チーム育能力向上研修」

- ◆講 師 公立学校共済組合 北陸中央病院 メンタルヘルスセンター
主任心理療法士 富田 さなえ
公益財団法人 富山県健康づくり財団 富山県国際健康プラザ
事業推進課 指導員（プロジェクトアドベンチャーファシリテーター）三浦 航兵

◆内 容

メンタルヘルス研修では、受講者が一学期を振り返り、自身のストレス状態を認識するセルフモニタリングの方法、ストレスを軽減するための具体的な対処法であるストレスコーピングについて講義と演習を通じて理解を深めました。自分を見つめ、自身の心身の健康を大切にしながら職務に取り組むことの重要性やそのためにこれからも活用できる具体的な方法を知る機会となりました。

チーム育能力向上研修では、前半の研修での気づきを活かし、いろいろな校種の教員が協力して多様なアクティビティに取り組みました。最初は緊張やごちなさもありましたが、次第に自分を解放しながら楽しく関わり合う姿が見られました。演習を振り返りながら「コンフォートゾーン」「ストレッチゾーン」「パニックゾーン」等、他者との関わり方や他者と関わる際の自身の感情の捉え方についての話を聞き、自分自身の理解に加え、児童生徒理解にも役立つ視点を獲得することができました。



自分の呼吸に意識を向けてリラックス～♪



受講者の声

- 今回の研修を通して、まずは教職員自身が心の健康を保つことの重要性を改めて実感しました。今後は、自分や同僚のちょっとした変化に気づき、声をかけ合えるような職場の雰囲気づくりを意識していきたいと思います。また、生徒に対しても、日々の関わりの中で心のサインを見逃さず、安心して相談できる関係を築いていきたいと感じました。
- 何事も行動に移すときは、安心感が最も重要だと感じました。そして、少し足を伸ばしてチャレンジすることから多くの気づきや学びを得ることができると学びました。これから、学級の中で様々な活動を行っていく中で、生徒同士の関係性の中に安心感が感じられるような人間関係づくりをしていきたいです。

それぞれのキャリアステージに合わせて

～年次交流研修～

2年次と10年次の教員が授業づくりや学級経営についてグループ協議を行いました。10年次教員は適切な助言の在り方について考えを深め、2年次教員は新しい気づきを得るなど、それぞれに学びの多い研修となりました。



受講者の声

- 授業づくりにおいては単元構想が重要であると学びました。ゴールの姿から逆算して授業の中身を考えることで、効果的な指導ができるイメージできました。（2年次）
- 若手教員の思いを汲み取り、適切に助言ができるよう、真摯に話を聞くことを大切にしたいです。自分が忙しくても、相手に寄り添える人間になりたいです。（10年次）



グループ協議の様子

異業種での学びを教育に生かすために

中堅教諭等資質向上研修「社会体験研修」

7月から「社会体験研修」がスタートしました。異業種での体験型研修を通して、対人関係能力の向上、視野を広げることなどを目的としており、今年度は県内37の施設・企業にご協力いただいています。（期間 7月から11月）



登り窯の棚板研磨の様子



受講者の声

- 県内で生成AIやメタバースといった先進技術で活躍する人材は少ないと思い込んでいましたが、「県内でも自分のスキルで活躍することができる」という言葉に感銘を受けました。教育公務員として自身に何ができるかを改めて考え、まずは身近なことを実践しようという意欲が湧きました。
- 登り窯の棚板を研磨し、次回の焼成に使用できるよう整備しました。棚板に付着した灰の状況は1枚1枚異なっており、それに対する砥石の摩擦のさせ方も違いが生じるため、同一条件の繰り返しは決していないということを実感しました。

大人も楽しい理科実験！ <理科教育講座より>

- ◆日時 令和7年7月25日(金)・28日(月)
- ◆講師 富山県総合教育センター 科学情報部 理科教室スタッフ
- ◆受講者 小学校および特別支援学校より7名参加
- ◆内容 2日間で4領域(生命、エネルギー、地球、粒子)の実験を実施



【電気遊び】
通電チェッカー「かがやき君」体験中



【ものの温まり方】
示温インクの色の変化を観察



受講者の声

- 薬品の後始末等を学ぶことができた勉強になりました。やはり理科はおもしろいと思いました。
- また理科の授業を持ちたいという気持ちになりました。
- 結果・考察の共有の仕方等を研修で学び大変勉強になりました。今日研修したことを学校でも実践したい。
- 大変楽しい研修でした。担任をしている支援級で理科の活動をしていきたい。
- 今回多くのことを実験して学ぶことができた大変参考になった。次回は事前に教科書を確認してから参加したい。

学校の「今」に応える生成 AI 活用最前線

個別ニーズに寄り添う訪問研修

情報教育室では、小・中学校、高等学校、特別支援学校の先生方や教育関係団体の皆様を対象に、各学校などを訪問して行う「訪問研修」を実施しています。

今年度は、8月末までに5校で延べ6回の研修を実施しました。特に生成AIの活用に関するご要望が多く、延べ150名ほどの方が受講されました。受講された方の感想の一部を紹介します。

- 世界が広がりました！楽しくてためになる研修を本当にありがとうございました。
- 生徒に活用してもらうには、まず教員である我々がある程度使いこなす必要があると思いました。
- 校務に積極的に使用し、ほかの先生方にも情報共有しながら広めていきたいと思います。
- 生成AIに関しては業務上は効率化が図れて便利なものだと思いますが、生徒と使うには場面ごとに慎重に判断していく必要があると感じました。

文部科学省がガイドラインを策定したことで、学校現場での生成AI活用が急速に進んでいます。教員の校務効率化や児童生徒の学習支援への活用が具体的に検討され、実践され始めています。また、例えばGoogle NotebookLMに動画の自動生成機能が追加されたり、Google Geminiにガイド付き学習機能が搭載されたりといった、生成AIサービスの改良・高機能化が毎月のように進んでいます。授業においては、生成AIを問題解決のヒントや創造的な活動に利用する取り組みが始まっています。教員が資料作成、議事録の要約、アイデア出しなどに生成AIを効果的に使用する事例も報告されています。生成AIの特性や利用上の注意点を理解し、少しずつでも活用していくことが大切です。

訪問研修をご希望される場合は、まずはお電話にて情報教育室までご連絡ください。担当者と日時や研修項目について打ち合わせた後、総合教育センターのウェブサイトにある専用のGoogleフォームより詳細をご入力ください。



情報訪問研修(7月31日 砺波高等学校)

豊かな「見立て」により、おのずと支援が見えてくる

～学校カウンセリング講座（子供が見える事例検討コース）～ 第1回

このコースは、児童生徒の心情や行動、関係性の理解を通して、見立てや手立てについて考える研修です。

◆講師 千葉大学 教育学部 教授 磯邊 聡

◆演題 「不登校児童生徒の理解と関わり」

「生徒に生じた問題をどう理解するかー教育臨床における「見立て」をめぐるー」

◆内容

午前の講義では、不登校の子や保護者とかかわる基本的な姿勢、子どもに生じた問題をどう見立て、支えるかについて、「目先の学校復帰をゴールにしない、豊かな不登校を目指す」「たくさんの要因、事実から見立てることでその子をイメージできる見立てができる」「見立てが豊かになるとおのずと支援が見えてくる」など多くの示唆を得た。

午後の演習では、校種混合のグループごとに、各学校にいる「気になる子」についての事例検討を行い、その見立て、支援について考えた。



演習「インシデントプロセスを用いた事例検討」

受講者の声

- 不登校の要因は一つと捉えず、様々な側面から問題を捉えること、また、自分自身の関わりも児童生徒を取り巻く環境の一部であることを認識し、常に自分自身の支援を振り返りながら適切な支援を行うことができるようにしていきたいと思います。

全ての児童生徒にとって分かりやすい授業を目指して

特別支援教育の視点を取り入れた授業づくり講座

～通常の学級における授業のユニバーサルデザイン～ 第2回

このコースは、児童生徒の心情や行動、関係性の理解を通して、見立てや手立てについて考える研修です。

◆講師 富山県教育委員会インクルーシブ教育推進員 浜松 英久

◆演題 「子供真ん中」の授業づくり

◆内容

講義では、授業のUD（ユニバーサルデザイン）について、授業の工夫・個への配慮・個に特化した指導の三段構えでつくる授業デザイン、授業のUDの視点と手立てについて具体的に学んだ。班別の情報交換では、情報の視覚化や学習展開の構造化といった授業のUDの視点と、ICT機器を用いた読み書き支援や個別の言葉掛けといった合理的配慮の視点から、通常の学級における授業の取組についてどのような工夫ができるのかを話し合った。



情報交換の様子

受講者の声

- 講義を聞いて、視覚化、焦点化、共有化、実感化といったUD化の視点を取り入れることができるように授業を仕組んでいきたいと感じた。特に振り返りの時間を取り入れ、生徒が実感化できるように工夫していきたい。
- 情報交換では、授業の工夫と個への配慮の区別をつけることが難しいと話し合った。個への配慮と思って行っている支援は、学級全体への支援としても有効だということを改めて感じた。

自立活動、100人いれば100通り！

特別支援教育講座（基礎から学ぶ自立活動実践コース）

◆講師 午前：黒部市教育センター 特別支援教育コーディネーター 林 真奈美
午後：特別支援学校教諭 8名

◆演題 午前：講義「自立活動って？！～『自立活動』はじめのいっぽ～」
午後：協議「自立活動の指導の実際～『自立目標・内容設定シート』の作成と日々の指導実践の振り返り～」

◆内容

講義では、自立活動の意義や指導の基本をじっくり学んだ。さらに、「キャッチ棒」や「ヒントカード」を使った学習活動を体験し、目標に応じた活動について具体的に学んだ。

協議では、演習用事例を用いて、子供の実態から自立活動の指導目標、内容を設定する体験を行った。体験後、各自がこれまでの実践を振り返り、今後の取組に向けての課題を話し合った。



午後 協議の様子

受講者の声

- 実際の学習活動を体験できたことで、自分の担当する生徒をイメージしながら学ぶことができた。
- 「自立活動目標・内容設定シート」を活用した演習では、子供の情報を基に、課題を整理し、指導すべき目標や具体的な指導内容を設定する過程を学ぶことができた。
- 2学期から、「自分でも工夫してやってみよう」という意欲がわいてきた。

学習者にどのような能力を第一義的に訓練し育成（陶冶）すべきかという問題に関して、古くから実質陶冶説と形式陶冶説の2つの基本的な主張がみられます。

実質陶冶は、教材の実質的・内容的価値に着目し、具体的・個別的な知識や技能（認知能力）それ自体の習得を主目的とするのに対して、形式陶冶は、一定の教材の学習を通して、記憶力や推理力、判断力や思考力等の一般的な諸能力（非認知能力）の育成や鍛錬を主目的としています。

実質陶冶の立場では、知識や技能は学問・科学・芸術といった文化遺産であり、人類が永い歴史の中で成し遂げた問題解決の成果として、学習者に重要な知識・技術をできるだけ多く習得させることを基本方針とします。評価についても「何を知っているか」を量的に測定すれば十分ということになります。そこには「何を知っているか」がほぼ自動的に「どのような問題解決を現に成し遂げるか」を保証するという暗黙の前提があったのかもしれませんが。

昭和35年改訂の学習指導要領は、高度経済成長期を目前にひかえ科学技術人材の育成が期待されたこと、アメリカの教育の現代化運動の影響を受けたことなどから、戦後から現在に至るまでのうちで学習内容が最も多くなっています。その結果、「落ちこぼれ」などの問題が起り、「詰め込み教育」などと揶揄されるようなことがありましたが、実質陶冶の観点に立てば理解できる面もあります。

形式陶冶の歴史は、古代ギリシャに遡ります。ここでは、算術・幾何や実用性を失った古典語などの難解な学問を学ぶことで、一般的な知識や推理能力を高めるとされ、すべての学問を効果的に習得する礎になると考えられていました。その後、こうした考え方は18世紀までにヨーロッパに渡り、学問の分野は、文法、論理学、ラテン語、ギリシャ語などに拡充していきます。わが国でも少し前に流行った同じような取組みとして、百マス計算や古典文学の暗唱があります。これらの有効性を科学的に検証するのは難しそうですが、感覚的には「頭の体操」や「地頭の鍛錬」のような効果があることは確かなように思えます。そういう意味では、これらの例も形式陶冶説に基づいているといえるでしょう。

この点について科学的に証明したのが、20世紀初頭のアメリカの心理学者ソーランドイクです。彼は形式陶冶説を学習の「転移」の問題として捉えた上で、学習において「転移」はそれまで考えられていたほど広範囲にわたって容易には生じないとして、形式陶冶説を否定しました。ただし、学習内容が類似しているもの同士の場合は、ある程度学習

の「転移」が生じるとし、形式陶冶説の可能性も示しています。

「転移」についての研究は、その後（1950年代後半）、ブルーナーに引き継がれます。彼は「科目・単元の細かい知識ではなく、その科目・単元に通底する基本的な考え方・観念を教えるべきだ」とし、教材や教科の基本的な考え方・観念である「構造」に着眼することによって、学習転移論を質的に高めました。また、「学び方を学習する」という彼の発想は陶冶説に多くの示唆を与えました。これとほぼ同時期の研究として西ドイツの「範例方式」がありますが、ともに形式陶冶説を支持するものであり、わが国の「新しい学力観（1990年から本格導入）」の理論的根拠になっています。「新しい学力観」では評価についても観点別評価が重視され、現在に至っています。

二つの陶冶論に関する研究の成果から、私たちは以下のことを学ぶことができます。

- 知識は覚えただけで自然に活用できるようなはならない。
- 学習の「転移」はそれほど簡単に生じない。知識は活用できる範囲を想定し、活用しやすい形で習得しないと「転移」は期待できない。（全国学力・学習状況調査におけるA問題とB問題との正答率の差からも明らか）
- 資質能力は、学習内容と切り離して、形式的に教え込まれたり訓練したりすることはできない。
- 教材を学ぶ過程で資質能力は身につく。資質能力を身につけるためには、それに適した質の高い教材が求められる。

形式陶冶説と実質陶冶説の論争は、今では、二者択一の議論というよりは知識と資質能力の関連性をうまく整理したものと捉えることができます。

現行の学習指導要領の基本コンセプトは、**コンテツベース**「どれだけ知っているか（知識重視）」から**コンピテンシーベース**「何ができるか（資質能力重視）」へのパラダイム転換といわれています。形式陶冶説を再考することで、このパラダイム転換の本質を探る手掛かりとなると考えています。



随想

聴覚総合支援学校にて

教育相談部長 城石 祥子

先日、聴覚総合支援学校を訪れる機会がありました。難聴の子供たちがどのように音を聞いているのか、体験を通して学ぶ研修でした。耳に装着している機器を通して聞こえる音は、私が日常で当たり前前に受け取っている世界とはまるで違っていました。たくさんのいろいろな音が聞こえ、人の声が雑音に埋もれて言葉の輪郭が曖昧になり、とても分かりづらいのです。それでも子供たちは懸命に「聴こう」としていました。

その姿に触れたとき、ふと母のことが頭に浮かびました。母は今年で 91 歳です。年齢からすると驚くほど元気で、毎日の食事や洗濯を任せられるほどしっかりしています。本が好きで週に何冊も読破していることに驚かされます。また、庭に小さな畑を作り、いろいろな作物を収穫して生き生きとした表情を見せる母の姿には、尊敬と感謝の気持ちが尽きません。しかし、最近耳が遠くなり、補聴器を着けてはいるものの聞き返すこと

が多くなりました。正確に聞こえていないことでの行き違いもよくあり、物忘れも多くなりました。そんな母に、私はつい苛立ちを覚えてしまうことがしばしばあったのです。

しかし、この子供たちを見てみると、母も聴こえづらい世界の中で懸命に「聴こう」としているのかもしれないと思い始めました。聞き返すのは、聴こうとする努力の証であり、忘れてしまうのは、精一杯今を生きる証拠ではないかと。そう思うと母への見方が少し変わってきました。

私自身が人の弱さや不自由さにどう向き合うかを問われているのかもしれないと思うようになりました。母にもう少し優しくなろう。聴こえないことに苛立ちではなく、理解と敬意をもって向き合えるようにしたい。そして、母と日々の暮らしを共にできるという何にも代えがたい幸せをかみしめ、老いに向かう母を支えていきたいと思いました。

科学の散歩道

アンモナイトの魅力

科学情報部 主任研究主事 佐藤 謙治

アンモナイトは平らな巻き貝のような形をした殻を持つ特徴があり、恐竜と同様、大変人気のある化石です。その起源は、古生代シルル紀末期（もしくはデボン紀中期）と古く、現存するオウムガイと同じ祖先から進化してきたと考えられています。また、アンモナイトは頭足類（イカやタコの仲間）の分類群の一つで、現在までに約 10,000 種の記載があります。海洋に広く分布し大繁栄していましたが、中生代の終わりの白亜紀末を最後に地球上から姿を消してしまいました。古生代と中生代の下位に当たる各年代を生きた種はそれぞれに示準化石とされており、地質学研究にとって極めて重要な生物群となっています。

アンモナイト化石の研究は世界中で行われていますが、その種類と数の多さは北海道がダントツです。炭鉱で栄えた道央部に位置する三笠市立博物館には、開拓時代の地質調査によって発見された貴重な化石を含む道産 600 種を中心として、約 1,000 点が展示されています。直径 50cm から 1.3m にも及ぶ巨大なアンモナイトの化石が多数ならんでいる展示室の光景はまさに圧巻です。国外では直径 2.5m にも達するアンモナイトの化石も発掘されており、同館ではその模型が展示してあります。

アンモナイトの殻には仕切りのある小さな部屋が多数あります。各部屋は体管（連室細管）でつながっており、体内のガスや液体を出し入れすることにより、浮力を調節していたと考えられます。アンモナイトの殻を外から見ると、縫合線と呼ばれる模様が見られ、この形にも様々な特徴があり、生きていた時代とともにその模様の移り変わりをたどることができます。化石を手にとって、じっくり観察することで悠久の進化の営みが感じられます。

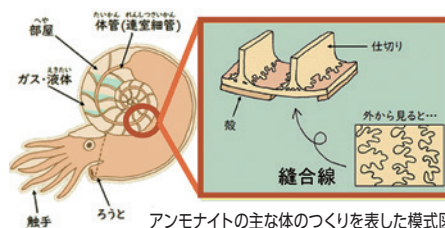
アンモナイトがほとんど知られていなかった時代、川沿いの地層で大きな化石を発見した人はどんな驚きを覚えたのでしょうか。



大型のアンモナイトの化石
(三笠市立博物館収蔵)



アンモナイトの化石の表面に見られる縫合線
(三笠市立博物館収蔵)



アンモナイトの主な体のつくりを表した模式図